

# 根 来 寺 坊 院 跡

— 前山地区宅地造成工事に伴う調査 —

1991年12月

(財)和歌山県文化財センター

# 例 言

1. 本書は宅地造成工事に伴う根来寺坊院跡の緊急発掘調査の概要である。
2. 試掘および発掘調査は大貴産業株式会社より和歌山県文化財センターが委託を受け実施した。
3. 試掘調査については和歌山県文化財センター主査・富加見 泰彦が、発掘調査については同技師・村田 弘が担当した。
4. 図および図版作成には藤原紀美・清瀧裕美の助力を得た。また、中世寺院の防御施設については滋賀県米原町教育委員会・中井 均氏のご教示を得た。記して謝意にかえさせていただく。
5. 本書の作成については富加見・村田が協議の上これにあたった。

# 目 次

例 言 ・ 目 次	図1 調査地点位置図…………… 1
I 位置と環境および調査に至る経緯…………… 1	図2 A地区トレンチ位置図…………… 2
II 調 査…………… 2	図3 A地区トレンチ位置図…………… 2
a 試掘調査…………… 2	図4 本調査区遺構平面・断面図…………… 3
b 本調査…………… 3	図版1 試掘調査全景写真…………… 5
III ま と め…………… 4	図版2 本調査全景写真…………… 6

# I 位置と環境および調査に至る経緯

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は和歌山県の北部、紀ノ川北岸の山間の地に所在する。平安時代の末期、覚鑑によって開創された寺院であり、中世を通して教学の隆盛を誇った。

それとともに戦国時代末期には多数の僧兵を擁し、また、いちはやく鉄砲の導入をはかるなどして軍事的にも勢力を増大させ、畿内の戦局に多大な影響を与えたことが知られている。

この根来寺の南には通称前山と称される標高120m前後の独立山塊状の丘陵が東西1.5kmにわたって横たわっており、この前山が根来寺の南を画するとともに天然の要害となっている。

これまでの調査においても前山西端山頂の和歌山平野を一望する地点では櫓の跡と考えられる遺構や主稜線上の何箇所かにおいては岩盤を整形した土塁状の遺構が確認されている。

今般この前山の南斜面で大規模な宅地造成工事がなされることとなり、これに先だって県教育委員会では遺跡の重要性に鑑み対象区全域に渡って踏査を実施した。その結果、当該地内の尾根部に人為的と思われる大規模な凹みが、また、他の尾根部では前方後円墳の形状を呈する地形が確認された。このため、これら両地区（A・B地区 図1参照）については調査の必要が認められるとの判断に至り、とりあえず試掘調査を実施し、その結果を受けてB地区の一部について本調査が実施された。

以下、試掘ならびに本調査の概要を記することとする。

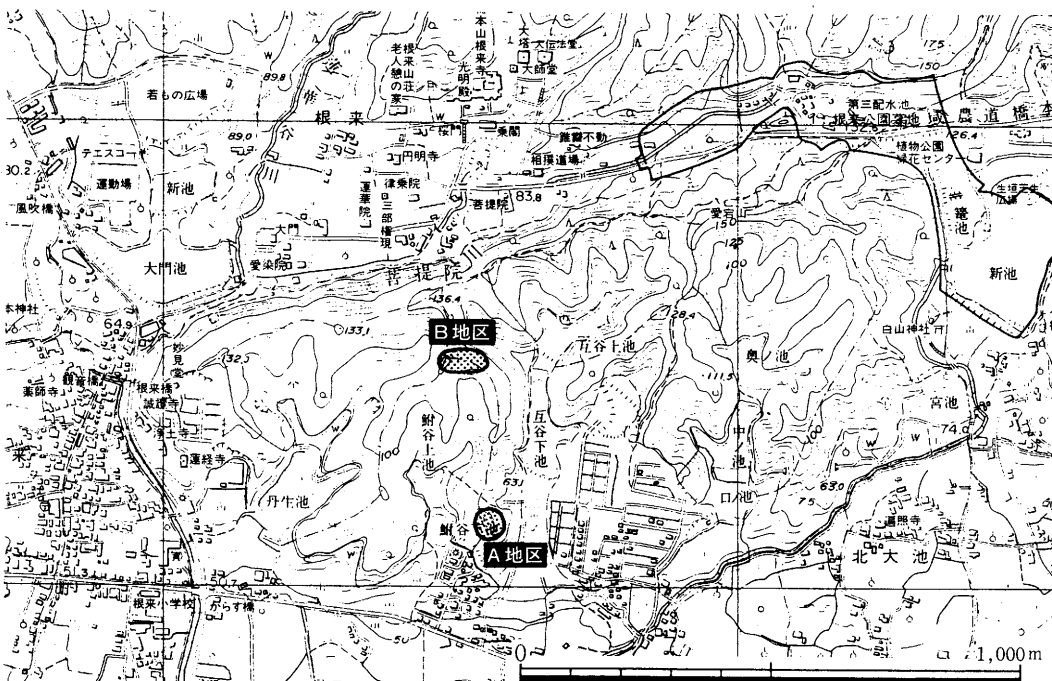


図1 調査地点位置図

## II 調査

### a 試掘調査

遺構の存在する可能性が高い2地点をそれぞれA地点、B地点と仮称し試掘調査を実施した。調査の結果は以下に記すとおりである。

**【A地点】** 平野部を一望できる地点で、地形が前方後円墳に類似するため試掘調査を実施した。丘陵の最高所標高97mの地点に4×4mのトレンチと、そこから西側と南側に派生する尾根筋に幅1m、長さ26mのトレンチを設定した。丘陵頂部のトレンチは腐触土の直下は和泉砂岩からなる地山で約0.7m掘り下げたが遺構・遺物は発見されず、他の2本のトレンチも腐触土の直下は地山となる。古墳としての可能性を示す地山整形痕、あるいは遺物は検出されなかった。以上のことから古墳でない事が判明した。また、この地点においては根来寺に関する遺構・遺物とも検出されなかった。

**【B地点】** 標高115~127mの尾根筋の5ヶ所にトレンチを設定した。第1・4・5トレンチで

は遺構は検出できなかったが、第2・3トレンチで、当初から肉眼で観察できた堀切を検出した。断面は「V字形」を呈し、幅5m、深さ3mの規模を持つ。尾根筋に直交して掘られているため、根来寺関係の軍事的色彩の強い遺構と考えられる。

このことから第2・3トレンチに関しては本調査による精査の必要が認められよう。

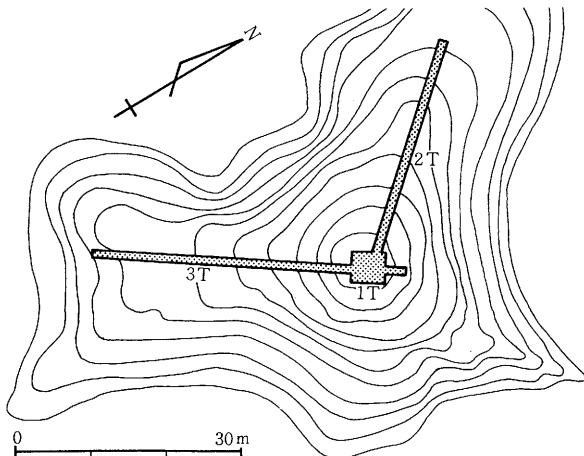


図2 試掘・A地区トレンチ位置図

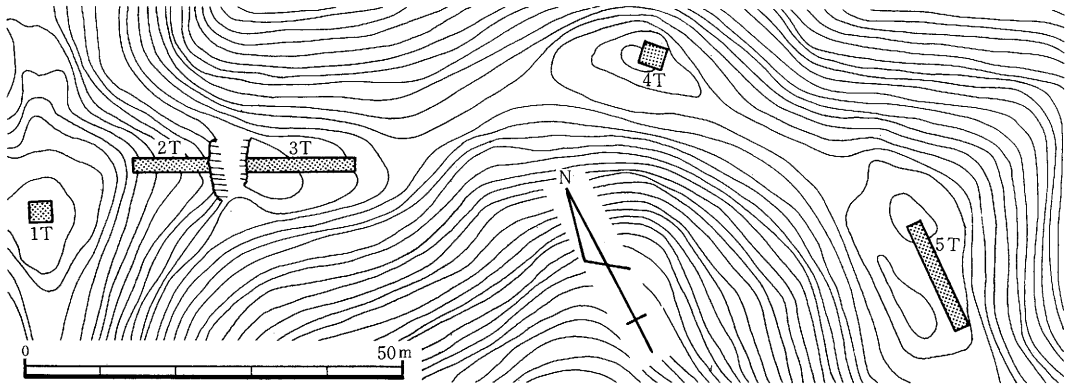


図3 試掘・B地区トレンチ位置図

## b 本 調 査

調査区は前述の凹み部分を中心として東西25m、南北およそ10mの幅で設定した。遺構図にも示したように凹み部分の西側はかなりの急斜面となっているが、これにくらべて東側ではなだらかとなっている。両サイドとも厚さ10cmほど腐蝕土の堆積が認められ、その下は黄色の山土（地山）となっていた。この面で遺構検出を行ったが、ここではなんら遺構の痕跡は認められない状況であった。

凹み部分は後世の堆積土と思われる山土が、中央部で厚さ60cm、北端および南端では1mほど堆積していたが、この土を除去した結果この凹みの断面はゆるやかなV字形を呈し、長さ約12m、最大幅6mの規模を有し、深さは東側の切り込み部で約2m、西側の高い方から見れば約4mとかなりの深さであることが判明した。

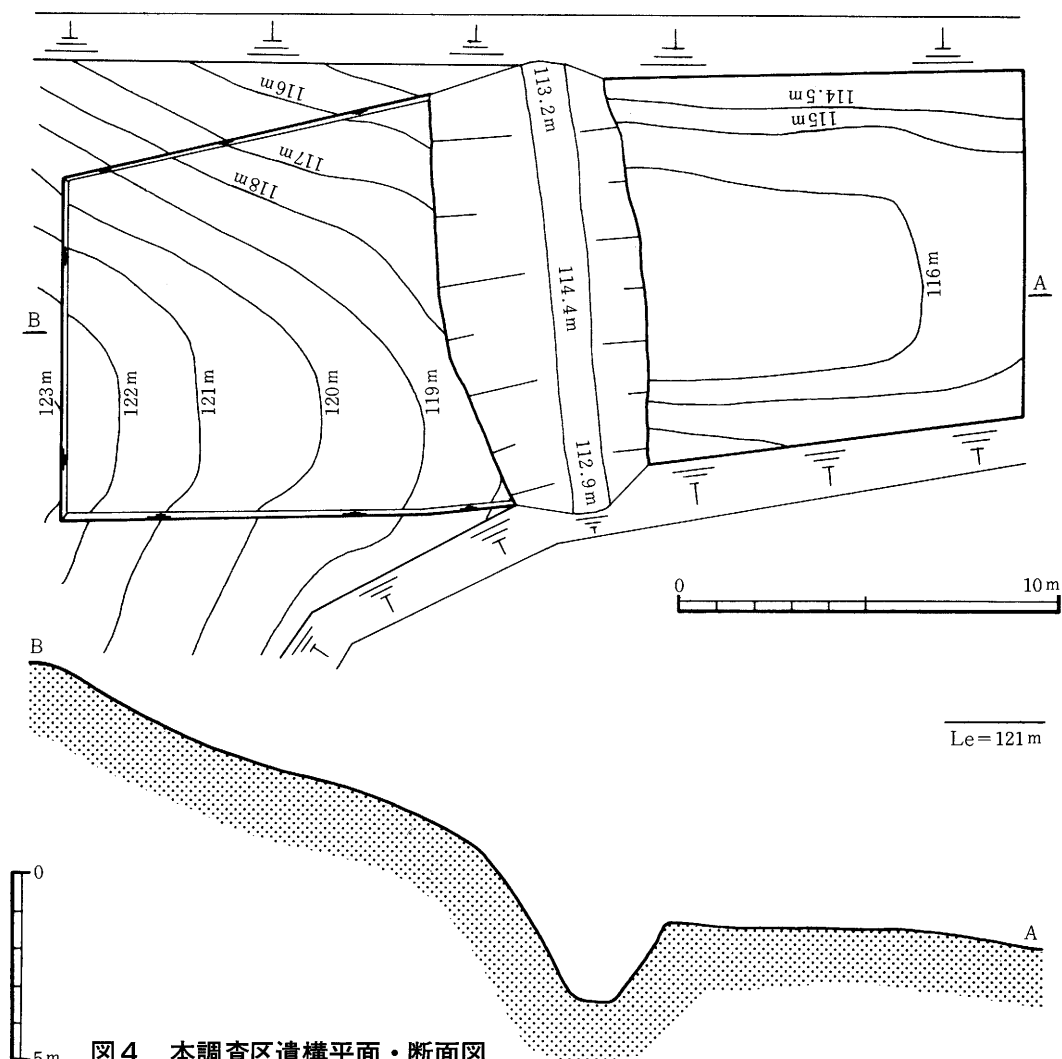


図4 本調査区遺構平面・断面図

岩盤を整形していることから明らかに人為的な所産と考えられるが、今回の調査では出土遺物はまったくなく、この作られた時期およびその用途については不明と言わざるをえない。

ただ近世以降においてこのような造作を行う理由が考えがたいこと、また根来寺との位置関係などを考慮すれば、中世後期に根来寺の防御のためにつくられた“堀切”である可能性が高いものと言えよう。

### III ま と め

先述したようにA地区の前方後円墳の形状を呈する尾根については自然地形であり、古墳ではないことが判明した。

紀ノ川中流域の南岸には船戸山古墳をはじめ多くの古墳が存在するが、北岸にあたる当地区周辺では段丘上に所在する小規模な古墳が知られるのみであり、山際もしくは尾根上に築かれた大規模な古墳は現在のところ確認されていない。その意味で今回の調査の対象となった尾根が古墳、とくに前方後円墳であったとすれば新たな発見であり、重要な問題を提起するものであった。残念ながら今回の調査ではそうした結果にはつながらなかったが、古墳の空白域である当地周辺に未発見の古墳が存在する可能性は残されており今後とも慎重な対処が望まれよう。

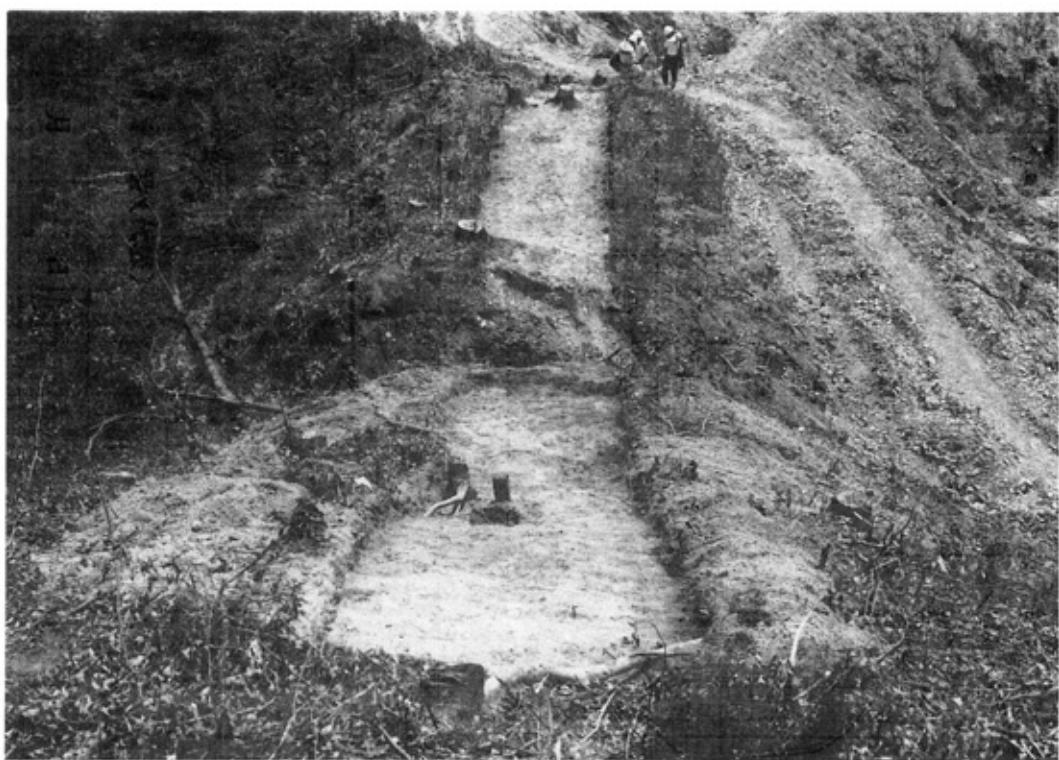
根来寺の防御施設と考えられる堀切についてはこれまでその可能性が示唆されていたが発掘調査において確認されたものは今回がはじめてのことである。

近年全国的に中世の寺院跡が調査されているが、その中で福井県勝山市に所在する白山平泉寺を代表例とするように土塁・堀切といった防御施設を伴う寺院の存在が知られるようになってきている。根来寺もまさにこの例と言えるわけで、中世寺院の立地・性格を再考する上でも重要な遺構と言えよう。

今回検出されたもの以外にも前山にはまだ数多くつくられている可能性があり、中世根来寺の全体像を正確に把握するためにも今後は山内の調査とともにこのような防御施設についての調査を推し進めていく必要があるものと思われる。



A地区第2トレンチ全景（南から）



B地区第2・3トレンチ全景（西から）



掘切遠景（南から）



掘切（南から）



# 根来寺坊院跡

—前山地区宅地造成工事に伴う調査—

平成3年12月

編集 和歌山県文化財センター  
発行 有限会社土屋総合印刷